

カトリック世界における「宗教復興」

聖体礼拝 adorazioni の今日的展開について

ふじわら くに子

藤原久仁子

1 はじめに

本稿は、宗教復興の潮流の一側面について、南ヨーロッパ・カトリック社会を対象に検討するものである。具体的には、「伝統的信心業の復興」という枠組みにおいて指摘されてきた「聖体礼拝」の復興現象を取り上げ、ヨーロッパ最南端に位置するマルタを事例にその今日的展開を示す。そして、「宗教復興」現象の中身を検討することを通じて、「伝統への回帰」というよりはむしろ、多様な実践の新たな創出及び意味の拡散が起きている点を指摘する。

一九七〇年代以降、「宗教復興」と呼び得る一連の現

象が各地に起きていることが報告されてきた。ただし、「宗教復興」という用語の指示範囲は様ではなく、「宗教」には制度宗教及び個々人による信心行為の双方が含まれ、「復興」には宗教集団の活発な活動、巡礼者数の増加や儀礼及び祝祭の壮麗化、日常生活における宗教的象徴や信仰実践の顕在化という穏やかかつ緩やかな傾向性、個人の救済やスピリチュアリティの強化を目的とした信心行為への人々の関心の高まり、「フアンダメンタリズム」と総称される現象等、様々な次元のものが含まれている。ヨーロッパ・カトリック世界に関しては、具体的にはこれまで次のような動きが指摘されてきた。すなわち、聖週間における聖金曜日の行列やカーニバルの

再導入、守護聖人祭や復活祭等祝祭の壮麗化、メダルやスカプラリオ着用の顕在化、ロザリオ、ノベナの祈禱、聖体礼拝や巡礼等のマリア崇敬やイエス崇敬と結びついた信心行為を実践する個人や集団の増加、カリスマ刷新運動の広がり等の現象である。なかでもカリスマ刷新運動は、一九六七年にアメリカの学生の間に開始されて以降急速に世界に広まり、一九九〇年には一二〇カ国、二〇〇四年には約その倍の二三八カ国にまで広がり、一億人を超える人々が参加するカトリック内部の大きな運動に発展した。

なぜこのような現象が起きるのか、科学的・合理的なものの方が支配すると考えられてきた近代西洋社会において、脱宗教化とは反対の方向に進んでいるかのように思われる現象がなぜ見られるのかという問題については、これまでさまざまな視点から分析がなされてきた。大まかにまとめるならば、それらは次のように分類できる。すなわち、①急激な社会変化に対するアイデンティティ・クライシス論、②第二ヴァティカン公会議における典礼刷新への反動論、及び③観光化論、である。①は

産業化や近代化の波といった社会背景を、②は宗教的背景、すなわちアジョルナメント（現代化）やエキュメニズム（教会一致促進運動）を掲げて典礼刷新を進めるローマ教会の影響を重視したものである。③は、「世俗化」した社会における文化的・リクリエーション的行為、すなわち非宗教的行為として巡礼や祝祭を取り上げ論じる際に用いられる枠組みである。①と②はそれぞれ、反世俗化、反近代あるいは反第二ヴァティカン公会議として伝統への再注目が見られることを重視し、「伝統への回帰」現象として対象を捉える傾向がある。本稿において取り上げる「聖体礼拝」も、伝統的信心業が復興した「伝統への回帰」現象として総括されることが多い。一方、カリスマ刷新運動に関しては、②の理由とは反対に、エキュメニズムを代表する新たな動きとして論じられることが多く、人々の参加の動機として、①の理由やスピリチュアルな体験を重視する近年の宗教を取り巻く傾向性が指摘される。ところで、「聖体礼拝」の形態の一つには、癒しの賜物信仰と結びついて発展した、カリスマ刷新運動による巨大な聖体を用いた「聖体礼拝」の

実践も含まれるのであるが、それについては今までほとんど言及されることがなく、カトリック世界における「宗教復興」の事例として取り上げられることもなかった。本稿では、「伝統への回帰」現象としてこれまでに論じられてきた「聖体礼拝」の多様な実践形態を示し、現代カトリック社会における宗教復興の側面について考察することにした。

2 聖体礼拝をめぐる信心業の歴史

「聖体礼拝」とは、聖体顕示台（オステンソリウム）や聖体容器（キボリウム）に納められ祭壇上に置かれた聖体の前で、個人的あるいは集団で祈る行為をいう。「聖体」とは聖餐式（ミサ）において聖別された白い種なしパンのことであり、形態はパンのままであるが「イエスの体」に変化したイエスの現存のかたちとして信仰されている。第二ヴァティカン公会議（一九六二―六五）以後、「習慣と儀式主義のために多少時代遅れ」となり、「ほとんど消え去ったかに見える聖体を礼拝する諸形式」は、一九八〇年代後半に「驚くべき再興 Renaissance」^⑦

（グレーシエル）を遂げ、現代カトリック社会において再び実践されるようになったと指摘される。以下では、聖体礼拝をめぐる信心業の発展の歴史について述べる。

聖体を保管する行為は四世紀初頭より始まったとされる。ミサに参加できず聖体拝領をすることのできない病者のために、聖別されたパンを一時的に保存することを目的に始められたという。当時は聖体容器に入れて聖櫃（タベルナクルム）に安置する現在のような形はとられず、ミサが行われる教会とは別の建物内に置かれていた。^⑩ あくまでも後の使用のために保存することを目的としており、聖体パンそれ自体は祈りと礼拝の対象となっていなかったが、徐々に保存された聖体を「神の永続的現存」とみなして礼拝する信心が広まっていった。聖体に化体するキリストとその臨在に関しては、九世紀より、象徴とみなすべきか字義どおり実体的な変化が生じているものと解するべきか議論が重ねられた。^⑪ 一二一五年、教皇インノケンティウス三世が第四回ラテラン公会議において「実体変化 transubstantiatio」を宣言したことで、聖体は聖別後に「イエスの体」に質的に変化する説が正

式に認められるにいった。一二六四年に「聖体の祝日 Corpus Christi」が全教会の祝日に制定されると、聖体崇敬は一層高まり、ミサ以外における聖体行列や聖体礼拝の信心が広まっていった。聖体顕示台を用いた聖体礼拝の形式は一四世紀頃より始まったとされる。^⑫（感覚的に把握しうる）偶有性 accidentis は変わらないが、（内的本質である）実体 substance は（自然界に存在するその他のあらゆるものの「偶有性」と「実体」とが互いに一致しているのに反して）奇跡的に変容する^⑬とする聖体の神秘は、トリエント公会議（一五四五―六三）において再び確認され、民衆の聖体信心の基準となった。一五

を受けて一八世紀末に多くの国に広まっていった。^⑮ 一六世紀末にフランスにおいて開かれた「聖体大会」は、聖体への信心を促進することを目的とした国際聖体大会へと発展し、以来ヨーロッパを中心に四七回の大会が開催されている。

聖体崇敬のあり方は、二〇世紀後半に二度の変化を蒙ることになる。一度目は、第二ヴァティカン公会議の典礼刷新による変化である。（聖体）パンはもはやそれ自体単一な「実体」ではなく、ある複雑な人工的・化学的集合体にほかならないという見解が台頭してきた^⑰時期にあつて、第二ヴァティカン公会議は、聖体の実体変化と神の臨在の神学的理解について新たな表現を採用したのである。「典礼憲章」^⑱の第1章第7条には次のように記されている。

偉大なわざを成就するためにキリストは、常に自分の教会とともに、特に典礼行為に現存している。キリストはミサの犠牲のうちに現存している。かつて十字架上で自身をささげた同じキリストが、今、